

ヴァイシェーシカに見る世界の帰滅と創造

田 中 典 彦*

はじめに

ヴァイシェーシカ学派の体系的綱要書であるとされているプラシャスタパーダの『バダールタ・ダルマ・サングラハ』(Padārtha-dharma-Saṅgraha:PDhS)中に、世界の帰滅と創造が説かれている。この書は「ヴァイシェーシカ・スートラ」(Vaiśeṣika-Sūtra:VS)に対する注釈であって、『プラシャスタパーダ・バーシャ』(Prašastapāda-bhāṣya)とも呼ばれている。しかしVSに対する注釈というよりも、むしろ六句義説を中心とした体系的なヴァイシェーシカの著作であると言える。VSが積極的に取り扱わなかった問題も幾つか見出し得る。世界の創造と帰滅も、それらの中の1つである。この説はプラシャスタパーダのVS理解という観点から、いくつかの重要な問題を提起していると考えられる。

1. PDhSの説く世界の帰滅と創造

PDhSの説く世界の帰滅と創造に関する記述は次の如くである。

「今、ここに四つの元素の創造と帰滅の次第を説く。梵天の数え方による百年が終り、その時の梵天が解脱する時、輪廻に疲れた一切の生類が夜に休息するために、全世界の主である大自在天(Maheśvara)に、世界を帰滅させようとの願が起る。それと同時に、身体と器官と粗大元素(mahābhūta)を造っているものであり、一切のアートマンに遍在する不可見力(adr̥ṣṭa)の活動が停止する。その時、大自在天の願とアートマンと原素(aṇu)との結合から生じた業によって、身体と器官との原因である原素が分離する。その分離によって原素の結合が

* 佛教大学文学部教授, 佛教大学総合研究所嘱託研究員(平成4,5年度)

消滅すると、それらは究極の極微 (paramāṇu) に至るまで帰滅する。全く同様に、地、水、火、風の粗大元素も、まさしくこの順序で、それぞれ前のものが、それぞれ後のものへと帰滅する。その後には、全く分離した極微のみが存続する。諸々のアートマンは、その時期の間だけ、ダルマとアダダルマと潜勢力 (saṃskāra) に支配されてある。

さて次に、生類に苦楽の享受が生じるように、という世界創造の願いが大自在天に生じる。すると直ちに、一切のアートマンに遍在していて活動を得た不可見力によって、アートマンと極微との結合が生じ、それにもとづいて風の極微に業が生じる。それら風の極微の相互の結合から、二重原子 (dvyaṇuka : 二微果) 等の順に大なる風が生じ、空中に揺れ動いている。

そして次に、その風の中に、水の極微から全く同じ順序に大なる水の集積が生じ、波動している。つづいてその水の集積の中に、地の極微から大地が生じ、凝固して存在する。これにつづいて、この大なる水の集積の中に、火の極微から二重原子等の順序で大なる火の塊りが生じる。

このように四つの粗大元素が生じ終ると、大自在天がただ願望するだけで、地などの極微を伴った火の原素から大きな卵が形成される。その卵の中に蓮華のような四面をもち、全世界の太祖である梵天を、全世界とともに生ぜしめて、その梵天に生類の創造を委ねる。

大自在天に委託された梵天は、優れた智と離欲と威力とを具えていて、生類達の業の熟していることを知って、それぞれの業にふさわしい智と享受と寿命をもった精神性を有する子孫であるプラジャーパティー、マヌ (人間の祖)、神と聖仙、父祖の衆を創り、口、腕、腿、足から四姓を創り、さらに高位から低位に至る他の種々の生類を創り、それらに意樂に応じた法と智と離欲と威力とを与える。』¹⁾

この説が、インドの神話的な世界創造説を部分的に採用しながら、しかもその中にヴァイシュエシカ派の主張する原子説を展開したものであることは既に指摘されている通りである²⁾。神話的創造説が、プラシャスタパーダによって、どこから採用されたものであるかということを確認にすることも重要ではあるが、さらに重要な問題は、どのような思考に基づいて、この世界の帰滅と創造説が説かれるに至ったかというこ

1) Vizianagram Sanskrit Series, vol. iv, *The Bhāṣya of Praśastapāda together with the Nyāyakandalī of Sridhara*, Ed. by Vindhyaśvari Prasad Dvivedin Benares 1895. p.48. ll.7-p.49. ll.17.

2) Erich Frauwallner, *History of Indian Philosophy, Bibliography and notes*. 255.

とであろう。

周知の如く、VSの中には神話的創造説はもちろん、世界の帰滅や創造は全く触れられてはいない。しかもプラシャスタパーダのこの説が、それ以後のヴァイシェーシカ派の定説となってゆくことを考える時、この問題を解明しようとする試みがなされてもよいと考える。

2. Adrṣṭaによる極微の最初の運動

VSは存在を分析的に解明しようとしたものであって、体系的に思想を展開しているものではない。したがって、その内容を1つの視点から体系的なものとして捉えるためには、全篇に散見する当該の記述を組織的に取り上げてゆくことから始めねばならない。しかしここではPDhSの世界の帰滅、創造説の内容に沿って吟味する方法を取ってみよう。

PDhSの説に見られ、VSに触れられているのは、アートマン、adrṣṭa（不可見力）、業による結合と分離、結合と分離によって果としての実体（存在）の生滅のあることとである。

VSには存在の生起に関する体系的な記述はないのであるが、存在に対する解釈は当然その背後に存在の成立を予測せしめる。VSのみによってそれを理解しようとすると次のようになるであろう。

極微（paramāṇu）が実体として常住なるものとしてある（VS. 4. 1. 5 および 7. 1. 20）³⁾。極微そのものは常住不変なものであるから、それ自体は生成もしなければ消滅もしない。しかし実体が実体を形成する（VS. 1. 1. 8）。すなわち極微としての実体が結合することによって結果としての実体を形成するのである。結合は如何にして可能であるか。結合、分離は業（運動）によってもたらされる（VS. 1. 1. 19）。その極微に最初の運動を与えるのは不可見なる力である（VS. 5. 2. 14）。adrṣṭaによって運動を与えられた極微が互いに結合することによって順次大なる元素へと形成されてゆく。そして、それらの元素によって現象世界が形成される。

このように理解すれば、全く素朴なものではあるが、極微としての実体を質料因とし、adrṣṭaを原初の動力因として世界の形成が説かれていることとなる。

3) VSは *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda.*, critically Edited by Muni Śrī Jambuvijayaji. Baroda, 1982. GOS, No.136 を用いた。

ここに原初というのは帰滅の後の創造期の初めではなく、最も初めという意味である。VSの作者カナードは、現象の世界を分析的に捉え、そしてそれを知識にのぼらしめた。そこでは世界が如何に形成されてきたかは直接には問題とされていない。しかし、形成と消滅が運動による結合と分離によると捉えている限り、少なくとも最初の運動に触れざるを得なかった。しかしそれは知覚され得るものではなかった。それを *adr̥ṣṭa*、つまり不可見力と表言したものと理解できる。

極微の最初の運動を記す VS.5.2.14 について検討してみる。

agner ūrdhvajvalanam vāyos tiryakpavanam
aṇumanasoś cādyam karmety adr̥ṣṭakāritāni

と示され、極微と意との最初の運動が *adr̥ṣṭa* によってもたらされる。これに対する Candrānanda (以下Cによって表記する) の注釈は、

vinaṣṭaśarirānām ātmanām sargādau pṛthivyādiparamāṇusv ādyam para-
sparopasarpanakarma na syāt, …… ādyam karma na bhavet adr̥ṣṭā-
dr̥ṣṭe/tasmād agner ūrdhvajvalanam vāyoś ca tiryakpavanam aṇuṇām
copasarpanakarma manasaś cādyam karma etāni prāninām adr̥ṣṭena
kṛtāni/4)

[身体を消滅したアートマンの、世界創造時における地等の極微との最初の相互接触の運動は (*adr̥ṣṭa* がなければ) ないであろう。……それ故に、火の燃え上がることと、風が横に吹くことと、極微の接触運動と意の最初の運動とは生類の *adr̥ṣṭa* によってもたらされる]

としている。ここに言われる最初 (*ādyam*) とは「身体を消滅したアートマンの」、さらに「生類の *adr̥ṣṭa*」という表言から、最も初めの世界創造時のことではなく、繰り返し行われる世界創造の最初を意味しているものと理解できる。身体を消滅したアートマンとは新たな身体と結合する前のアートマンである。生類の *adr̥ṣṭa* とは *PDhS* の解く *dharma*, *adharmā* を意味していると考えられる⁵⁾。したがって、この釈は、世界の帰滅から説き始める *PDhS* の説を受けたものであると考えられる。

Upaskāra本 (以下Uによって表記する) の注釈では、

ādyam iti sargādyakālinam ity arthaḥ tadā nodanābhighātādīnām abhāvāt

4) GOS. No.136, p.42.

5) VSが性質として17を数えているのに対して *PDhS* はそれに7つの性質を追加して24の性質を掲げている。その7の中に *adr̥ṣṭa* がある。追加された性質は実際には6しか読み取ることができない。このことに関して、ニヤーヤカンダリーは、*adr̥ṣṭa* を *dharma* と *adharmā* の二性質と理解すべきであると示している。

adrṣṭavad ātmasamyoga eva tatrāsamavāyikāraṇam…⁶⁾

〔最初のというのは世界の最初の時という意味である。その時には衝撃や打撃などは存在しないから、adrṣṭa をもつアートマンの結合のみが非和合因である〕とする。ādyam について、「その時には何の衝撃も打撃もないから」としていることからすれば、原初の創造時を意味しているように思える。しかしここでもadrṣṭavad ātmasamyoga が問題となる。adrṣṭa をアートマンに所属すると明確にしたのは PDhS である。

Thakur 本（以下Tによって表記する）の注釈は、

paramānūnām sṛṣṭyādau dvyaṇukajanakasamyogārambhakaṁ saṁhāre ca dvyaṇukārambhakasamyogavirodhivibhāgārambhakaṁ ca karmādrṣṭakāritam⁷⁾／

〔世界創造の初めにおける極微の二微果を生ずる結合の開始と、世界の帰滅の時における二微果において始まる結合とは反対の分離の開始の運動はadrṣṭa によって生ぜられる〕

である。二微果 (dvyaṇuka) という表言は PDhS' の影響を受けてのものであると考えられるが、adrṣṭa とアートマンの関係等には触れていない。したがって ādyam の理解に関しては、原初の世界形成時とも理解できるかも知れない。

ところで、PDhS は Karmaprakaraṇa において VS. 5. 2. 14 の adrṣṭa を取り上げている。

evam anyad api mahābhūteṣu yatpratyaṅsānumānābhyām anupalabhyamānakāraṇam upakārāpakārasamarthaṁ ca bhavati tad apy adrṣṭakāritam / yathā sargādāv aṇukarma agnivāyivor ūradhvatiryaggamane ……⁸⁾

この章において、運動が分類されて示されている。アートマンに支配される意識的運動と無意識的運動 (ātmādhiṣṭhiteṣu satpratyaṅyam asatpratyaṅyam ca karman)⁹⁾ とアートマンに支配されない無意識的運動とに分類され、adrṣṭa による運動は後者の中で述べられている。ここにも、世界創造の初めの aṇu の運動が adrṣṭa

6) *Vaiśeṣikasūtrōpaskāra of Śrī Śāṅkara Miśra, with the Prakāśikā Hindī commentary by Ācārya Dhunḍhirāja Śāstri*, ed by Nārāyaṇa Miśra. KSS. 195. 2nd.1969. p.318.

7) *Vaiśeṣikadarśana of Kaṇāda. with an anonymous commentary*, edited by Prof. Anantalal Thakur. published by the Director, Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Darbhanga 1957. p.54.

8) PDhS. p.309. ll.10-15

9) PDhS. p.303. l.1.

によっているとされているが、*PDhS*の創造説においても *adr̥ṣṭa* が *aṇu* の最初の運動に関わるのであるから、ここでの説と一貫しているものと理解するとすれば、*sargādau* は帰滅の後の創造時の初であると理解すべきであろう。しかし、アートマンに支配されない外界の四大元素における運動 (*anadhiṣṭhiteṣu bāhyeṣucaturṣu mahābhūteṣv apratyayam karma*)¹⁰⁾ に関わるものとして *adr̥ṣṭa* による運動が論じられていることは問題となる。つまりアートマンと *adr̥ṣṭa* との関係である。

*PDhS*においても *adr̥ṣṭa* は帰滅に関しても、創造に関しても重要な位置を与えられている。

*śarīrendriyamahābhūtopanibandhakānām sarvātmagatānām adr̥ṣṭānām vṛtti-
nirodhe sati*¹¹⁾……

が帰滅の時であり、

*sarvātmagatavṛttilabdḥādr̥ṣṭāpekṣebhyas tatsamyogebhyas*¹²⁾……

が創造の場合の *adr̥ṣṭa* である。すなわち、身体と感官と粗大元素とを造っているものが *adr̥ṣṭa* であり、すべてのアートマンに遍在するものであるとされる。造っているものとは言っても、それは質料的なものではなく、起生因としてのものである¹³⁾。何故ならヴァイシュエシカ派では質料因は決して極微としての実体であるからである。そこで、先ず *VS* 中に説かれるアートマンの理解から始めることとする。

3. 意とアートマンの運動

これまで極微の運動、つまり実体である地・水・火・風の四粗大元素の運動について考察してきた。そこで次に意とアートマンの運動に関して一考してみる。

ヴァイシュエシカにおいては、意とアートマンは地 (*pr̥thivī*) ・水 (*ap*) ・火 (*tejas*) ・風 (*vāyu*) ・虚空 (*ākāśa*) ・時間 (*kāla*) ・方角 (*diś*) とならんで実体であるとされている (*VS.1.1.4*)。そして実体 (*dravya*) は「運動と性質とを有し、和合因 (*samavāyi-kāraṇa*) であることが実体の特質である」(*VS.1.1.14*) と定義さ

10) *PDhS*. p.303. l.2.

11) *PDhS*. p.48. ll.5-6

12) *PDhS*. p.48. ll.14-15.

13) *NK* は *upanibandhaka* を *ārambhaka* とし、*Vyomavatī* は *utpattisthitihetu* としている。尚、*Vyomavatī* は、*The Praśastapādabhāṣyam of Praśastadevācārya with commentaries (up to dravya). Sūktī by Jagadīśa Tarkālankāra. Setu by Padmanābha Miśra, and Vyomavatī by Vyomaśivācārya (to the end)*. Ed. by M.M.Gopinath Kavirāj and Dhundhirāj Shāstri. *Chss.* No.61, 1924-30を用いた。

れている。実体が運動を有するとされているのであるが、運動に関して説いている別の箇所においては、九実体の中、虚空と時間と方角の三実体は無活動であるとされている（VS.5.2.23）。したがって、運動を有する実体は地・水・火・風の四大と意とアートマンということとなる。

四大には原子の形態（paramāṇu）が認められていて、これらの最初の運動が *adr̥ṣṭa* によってもたらされることについては前述の如くである。

VS. 5. 2. 14 はさらに意の最初の運動もまた *adr̥ṣṭa* によると説いている。そしてアートマンの運動に関しては、

*apasarṇam upasarṇam aśītapītasamyogaḥ kāryāntarasamyogāś cety
adr̥ṣṭakāritāni* (VS.5.2.19)

〔（アートマン）の脱出すること、侵入すること、飲食との結合、そして他の結果との結合は *adr̥ṣṭa* によってもたらされる。〕

としている。Candrānanda は「死の時に、前の身体から意が脱出することが *apasarṇa* である。別の身体と結合することが *upasarṇa* である」¹⁴⁾と意の運動として解釈している。Upaskāra も Thakur も同様である。

意に関しては、実体であり常住である（VS. 3. 2. 2）。しかも意は各人の身体の内に1つのみ存在する（VS. 3. 2. 3）。そしてそれは原子大のものである（VS. 7. 1. 30）。アートマンと感官と対象が接触した場合でも、意がそこに働かなければ認識が成立しない（VS. 3. 2. 1）とされ、認識にとって重要な働きを担っている。意の最初の運動が *adr̥ṣṭa* に基づくことは前述の通りである。ところで、意は身体内の器官と見做されるものであるから、何らかの方法によって身体に入らねばならないし、また身体の死に際してはそこから脱出しなければならない。アートマンと結合して身体に侵入するとしても、単独に身体に侵入して、同じく身体に侵入するアートマンと身体内において結合するとしても、意に関しても身体への侵入および身体からの脱出という運動が認められねばならないこととなる。したがって、*apasarṇa*, *upasarṇa* は意の運動とも解釈され得るであろう。注釈者が、これらの運動を意の運動と解釈したのはこのような理由によるとも考えられる。

しかし VS. 5. 2. 19 のそれは、この章の構成からしても明らかにアートマンの運動として説かれたものである。アートマンの運動に先だって、意の運動が説かれる。その次第は次の如くである。

14) GOS. No.136, p.43 *maraṇakāle pūrvasārīrād manaso niḥsaraṇam apasa-rṇam*.

意の最初の運動が *adrṣṭa* によること (VS. 5. 2. 14)。その他の意の運動は手の運動によって説明されたこと (VS. 5. 2. 15)。

アートマン・感官・意・対象の接触から楽苦があること (VS. 5. 2. 16)。

ストラの順は少し異なるが、内容的にはこれと全く対応した形で、次にアートマンの運動が説かれている。

アートマンが死時に身体から脱出すること、別の身体に侵入すること、飲食との結合、その他の結果との結合は *adrṣṭa* によること (VS. 5. 2. 19)。

その他のアートマン¹⁵⁾の運動は身体の運動によって説明されたこと (VS. 5. 2. 18)。
adrṣṭa が存在しない時、アートマンの未来の身体との結合がなく、それが解脱であること (VS. 5. 2. 20)。

かくして、初期のヴァイシェーシカ派の説においては、アートマンは運動を有するものと考えられていたこと¹⁶⁾、そしてそれが *adrṣṭa* によってもたらされるとされていたことが知られる。運動を有さないとされる虚空・時間・方角を除く他の実体、つまり地・水・火・風・アートマン・意の運動はすべて外的な *adrṣṭa* によって与えられることとなる。

このようなアートマンが運動を有さないものとされたのは *PDhS* においてである。「虚空と時間と方角とアートマンは実体ではあるが運動を有さない。何故ならば普遍などのように形体を有しないからである」¹⁷⁾とされている。一方、意に関しては *VS* を引用する形式で、意を説く節に「(意が) 身体から脱出することと身体に侵入することが説かれているから、(意には) 結合と分離がある」¹⁸⁾とする。ではアートマンの身体からの脱出、身体への侵入は如何なることになるか。

apasarṇanakarmopasarṇanakarma cātmamanahsaṃyogād adrṣṭāpekṣāt /¹⁹⁾
〔(アートマンが) 身体から脱出する運動と身体への侵入する運動とは *adrṣṭa* によるアートマンと意との結合にもとづく。〕

つまり、*adrṣṭa* による意の運動があり、意がアートマンと結合することによってアートマンが身体から脱出し、また身体への侵入するものと考えられたのである。VS. 5. 2. 19 に対して注釈者が意の運動という解釈を与えたのはこれらの *PDhS* の説に基づ

15) Candrānanda はこのアートマンを風と解釈しているが、誤りである。

16) 野澤正信氏は、*VS* にアートマンの運動を説く一節があったことを論証しておられる。「ヴァイシェーシカにおける生死について」『日本佛教学会年報』第46号, pp.460-462.

17) *ākāśakāladigātmanām saty api darvyabhāve niṣkriyatvaṃ sāmānyādivad mūrtatvāt* / *PDhS*. p.308.

18) *apasarṇaṇopasarṇavacanāt saṃyogavibhāgau* / *PDhS*. p.89.

19) *PDhS*. p.308. ll.22-23.

いたからである。

アートマンが運動を有しないと規定すれば、当然、運動を有する意との結合を重視せざるを得ないこととなる²⁰⁾。

4. *adrṣṭa* と *Ātman*

ヴァイシュエシカ派の説く *adrṣṭa* に関しては、これまでも諸学者によって研究されてきた²¹⁾。スートラには、直接 *adrṣṭa* の語を用いている用例は12回見ることができる。今、それらをスートラに基づき、先学の研究を参照しながら要約的に捉えてみる。*adrṣṭa* の用例は、その語のもつ基本的な意味としての〈見えない〉を示している場合と〈見えない力〉を意味している場合とに一応分けて捉えることができるようである。

〈見えない〉を意味する *adrṣṭa* は VS. 2. 1. 10, 2. 2. 20, 6. 2. 1, 6. 2. 2, 8. 13に見られる。

VS. 2. 1. 10 は風が見えない証相 (*adrṣṭalinga*) をもつことを説く。VS. 2. 2. 20 は U本には欠けているが、その前のスートラから、認識に関する疑惑 (*samśaya*) が問題とされ、“*drṣṭam adrṣṭam*” 「見られるものか、見られないものか」という疑惑について述べている。Cの釈によれば、疑惑には二種類がある。外的なものと内的なものとのであるとし、さらに外的な疑惑にも二種類がある。現に見えるものと、現に見えないものに関してである。その中、現に見えないものについて「実際に見られるものであるのか、見られないものであるのか」と疑うことがこの意味であるとする。ここでも *adrṣṭa* の意味は〈見えない〉ということである。

6. 2. 1 は C本, T本の両本と U本とでは理解が異なる。すなわち、

C.T本 : *drṣṭānām drṣṭaprayojanānām drṣṭābhāve prayogo'bhyudayāya* /

U本 : *drṣṭādrṣṭaprayojanānām drṣṭābhāve prayojamam abhyudayāya* /

U本にのみ *adrṣṭa* の語が見られる。このスートラは VS. 10. 2. 8 にもあり、そこでは U本も C, T本と全く同じ文章となっている。修行等の果報について述べているの

20) アートマンが運動しないものとなったのは、アートマンが遍在するものと考えられたことによるということが、野澤氏によって論じられている。野澤正信前掲論文。

21) 金倉圓照「勝論の *Adrṣṭa* について」(『鈴木学術財団研究年報』1968~1970. pp. 5-7. 1971. pp. 5-19.)

山田恭道「ヴァイシュエシカのアドリシュタ説」(『印度学仏教学研究』第3巻, 第2号, 昭和30年, p. 124)

であるが、U本の釈によれば、見える果報とは農耕や商売におけるものであり、見えない果報とは祭式、布施、梵行などによるものである。後者は *abhyudaya* (昇天) であることが言われている。したがって、いずれのストラによっても〈見えない〉果報が昇天であるということには相違はない。VS. 6. 2. 2 も前のストラにつづいて、沐浴、断食、梵行などは〈見えない〉果報に導くことを述べたものである。

8. 13 であるが、U本では VS. 8. 2. 2, T本では VS. 8. 1. 12 である。知の生起を説く箇所である。前のストラに「これ、あれ、君はこれをした、彼に食を与えなさい、という表言は知に基づいたものである (8.12)」とされたのに続いて、そのような表言は見られたものについて成り立つのであって、見られたものでないものには成り立ち得ないことを述べるのである²²⁾。*adrṣṭa* は〈見えない〉を単純に意味していると理解できる。

〈見えない力あるいは働き〉を意味すると理解できるのは、VS. 5. 1. 15, 5. 2. 2, 5. 2. 4, 5. 2. 8, 5. 2. 14, 5. 2. 19, 6. 2. 15 に見られる *adrṣṭa* である。VS では意志的努力、結合、衝撃、重さなどによって運動が生ぜられるとされている。しかし、それらによらない運動が *adrṣṭa* によるとされている場合がある。VS. 5. 1. 15 は「宝珠の動くこと (*maṇigamana*)、針の接近 (*sūcyabhisarpaṇa*) のようなものは *adrṣṭa* によってなされる」²³⁾と説く。針の接近とは針が何かに接近してゆく運動を意味すると考えられるが、ストラのみでは理解することができない。三注釈は、この針の接近に関しては等しく針の磁石に向かって行進する運動であるとしている。つまり磁力ということになるが、それは〈見えない力〉である。宝珠の運動については、注釈によっても判然としない。それは、後に *adrṣṭa* と同一視される *dharma*, *adharmā*, つまり人間の行為の結果としてもたらされる功德、罪過と関係づけられて釈している。

VS. 5. 2. 2 は地の運動に関して述べている。前のストラにおいて、地の運動は衝撃などから生じることを説き、そして「それとは異なる地の運動は *adrṣṭa* によって生じる」²⁴⁾とするのである。例えば、地震などの地の運動は、当時としては〈見えない力〉によって起こると捉えられていたのである²⁵⁾。次に VS. 5. 2. 4 では水の落下運動を述べ、それは、他の物体との結合のない時には重さそのものによって起こるとした後、「それとは異なる運動は *adrṣṭa* によって生じる」とするのがストラの意味で

22) *drṣṭeṣu bhāvādrṣṭeṣv abhāvāt*.

23) *maṇigamanam sūcyabhisarpaṇam ity adrṣṭakāritāni* / U本では *ity* がなく、また *adrṣṭakāraṇam* となっている。T本では 5.1.13.

24) *tad viśeṣādrṣṭakāritam*. T本に欠く。

25) 地震の例を示すのはC本の釈。p.40, 1.9.

ある。Cの積によると、穀物の増大と消滅の水の落下運動であるとする²⁶⁾。豊作をもたらすか、不作をもたらすかに関わる降雨を意味するようであるが、それが万人の *adr̥ṣṭa* によって生ぜられるという主旨が加えられているから、これもまた前述の如く *dharma*, *adharma* としての *adr̥ṣṭa* と関係づけて積しているものである。このストラはC本のみにあるため、他の注釈を参照できない。したがって、異なった水の落下運動とは何かは判然としない。

VS. 5. 2. 8は「木における水の上昇は *adr̥ṣṭa* によって起こる²⁷⁾とする。木の根の吸水や細管現象や浸透圧のことを言うのであろうが、〈見えない力〉によって起こると捉えられていた。VS. 5. 2. 14 に関しては極微と意の運動を考察する際に取り上げてきた。火の燃え上がることと風の横に吹くことも *adr̥ṣṭa* によるとされている。それらは火と風の性質のようにも考えられるが、〈見えない力〉による運動とされている。VS. 5. 2. 19 は前節に触れた通りである。

VS. 6. 2. 15 は、その前のストラとの内容的つながりによって、貪欲の生起について述べていることが理解できる。そして *adr̥ṣṭa* から貪欲の生起のあることを説いたものである²⁸⁾。この場合の *adr̥ṣṭa* は貪欲をもたらすものであるから、人間の心の働きに関係する。 *dharma*, *adharma* と関わりを持ち得る唯一の用例と言えよう。

以上、VSにおいて *adr̥ṣṭa* の語の用例を簡単に要約してみた。なお、これら以外に *adr̥ṣṭa* に関係するものとして 5. 2. 20 がある。それは、

tadabhāve somyogābhāvo, prādurbhāvaḥ sa makṣaḥ /

〔それが存在しない時には、結合がなく、現われない。それが解脱である〕

と説く。 *tad* は前のストラとの文脈からして *adr̥ṣṭa* である。Cの積には「このような形の、無始以来の脱出等の因である *adr̥ṣṭa* がない時には生存 (*jīva*) と言われるアートマンと意との結合は存在しない。そして他の身体の現われることもない。これが解脱である²⁹⁾ とされている。ただし、Cの積は前のストラにある *apasarpaṇa*, *upasarpaṇa* を意の運動としていることに注意しなければならない。既に述べてきたように、元来これはアートマンの運動と見做すべきであるから、ここに言う結合は

26) *sasyānām samṛddhaye vināśāya vā sarvajānānām adr̥ṣṭena janitam patanakarma adr̥ṣṭakāritam ucyate* /

27) *vṛkṣābhisarpaṇam ity adr̥ṣṭakāritam* / T本では5.2.6.

28) *adr̥ṣṭāt* / 短か過ぎて、前ストラからの文脈によってしか理解できない。

29) *evam rūpasyānādy apasarpaṇādi nimittasyādr̥ṣṭasyābhāve jīvanākhyasyātmamanahsaṃyogasyābhāvo 'nyasya ca śarīrasyāprādurbhāvo yaḥ sa mokṣaḥ* /

アートマンと身体との結合を意味するものと解する。Uの釈はさらに複雑なものとなっているが、既に dharma, adharma を用いてのものである。

VSにおいて、アートマンと *adr̥ṣṭa* との関係を求めるとすれば、5.2.19 と 5.2.20 においてのみとなる。そこでは、*adr̥ṣṭa* によって動かされたアートマンが身体に出入りし、生存がくり返されるということのみが知り得る。*adr̥ṣṭa* は〈見えない力〉として外的なものである。

5. アートマンの性質としての *adr̥ṣṭa*

VSの後、徐々に思想的体系化が進められてゆく中に学説の変化が余儀なくされたものと考えられる。それには他学派の影響もあるのであろう。しかし体系化にともなう変化もあり得る。*adr̥ṣṭa* の場合もまたそうである。ヴァイシュエシカ派の思想的体系化を図ったプラシャスタパーダの *PDhS* においては、*adr̥ṣṭa* はすべてのアートマンに存在し、人間の行為によってもたらされる「見えないもの」と名づけられる潜勢的な力となって存続するものと考えられるに至った。その潜勢力 (*samskāra*) はまた、行為の善悪に対応させられて功德 (*dharma*) ・ 罪過 (*adharma*) とよばれ、後の生存に影響をおよぼすものとされた³⁰⁾。さらに世界創造の原動力として働くものとされた。そしてついに *adr̥ṣṭa* はアートマンの性質 (*guṇa*) と見做されるに至った。

如何にして VS からこれらの説が形成されてきたかを理論的に後づけることは極めて困難なことである。それは、VS に対する三注釈書が少なくとも *PDhS* よりも後のものであって、VS から *PDhS* に至る思想の展開過程の理解を与えるものではないからである。むしろ逆に、それらの注釈が *PDhS* によって説かれた思想によって VS に対する注釈を施していると考えられるからである。

プラシャスタパーダは *PDhS* を著わすについて、*Padārtha* (句義) 説をその中心においている。句義によって VS の思想の体系化を図っているのである。句義は一種の範疇論であって、それを成立せしめるには範疇を確立させる為の知的作業がなくてはならない。プラシャスタパーダは、その方法として VS 中の「普遍と特殊とは知によるものである」(1.2.3) に求めたのである。普遍は共通性において求められる。特殊は相違性において求められる。プラシャスタパーダは普遍を求めること、特殊を求めることによって句義説を確立していった。そして *PDhS* においては、句義に関して、

30) 服部正明「古典ニヤヤ学派のアートマン論とその背景」(『哲学研究』第43巻、第6冊、京都哲学会、昭和41年9月30日)参照。

それらの共通性 (sādharmya) と相違性 (vaidharmya) を知ることが真実知 (Tattvajñāna) であって、至福を得る因であると説いているのである³¹⁾。VSにおいては、あらゆるものが分類して示された。そしてPDhSに至って、それら分類されたものを普遍と特殊という認識に基づいて捉えることによって句義が成立していったものと考えられる。地・水・火・風・虚空・時間・方角・意・アートマンのsādharmyaは実体性 (dravyatva) なのである。そして実体性を有するものが実体とされるわけである。このようにして六句義をたて、それによってVSの説くところを思想的に体系化していったのである。

全く同様の方法によって、VSにおいては未だ占めるべき特定の位置が与えられていなかったadrṣṭaなどが検討されたとしても不思議ではない。その方法にしたがって考察すると、前節に見てきたように、adrṣṭaに共通して捉えられるのは<見えない>ということである。VSに説かれる種々のadrṣṭaのsāmānyaは、正に<見えない>ということなのである。しかし、adrṣṭaという句義はたてられない。何故なら、句義の定義、つまり「有ること (astitva)、名づけられること (abhidhetyatva)、知られること (jñeyatva)」に抵触するからである。

adrṣṭaが運動に関わるからとして「運動」³²⁾に組み入れるというわけにはゆかない。句義説に言う運動するものは実体であって運動なのではない。「運動」は運動そのもの、あるいは運動の様態ともいうべきものをさしている。運動は必ず1つの実体に依存し独立にあることはないのであるから、それは実体の動的な現われかたと言い得る。VSにおいても、adrṣṭaが運動するのではなく、それによって動かされた極微、意、アートマンが運動するのである。adrṣṭaはそれら実体の動的な現われかたなのではなく、それら実体の運動の因である。したがって「運動」には所属させられない。「実体」にはどうであるか。それもまた実体の定義から無理とされたのであろう。「普遍」「特殊」「和合」にはその性質上不可能であり、残るは「性質」にのみ可能となる。かくて、ブラシャスタパーダはadrṣṭaを「性質」に組み入れたのである。

さて、いずれの実体の性質とするかが次の問題となる。九実体の中、虚空、時間、方角を除く、地・水・火・風・意・アートマンがすべてadrṣṭaによって運動を与えられる実体である。したがって、それらの実体の有する共通の性質としても差しかえないわけである。しかしadrṣṭaは結局アートマンの性質とされたのである。

31) 拙論、「VaiśeṣikasūtraとPraśastapāda」(『仏教学会紀要』創刊号、佛教大学仏教学会、平成5年3月、p.31)

32) 「運動」は句義としての意味を表わす。以下、「実体」「性質」も同じ意。

adr̥ṣṭa がアートマンのみの性質であるとされることによって、それによって運動を与えられるとされていた他の実体はすべてアートマンの支配下にあることになる。何故なら、以後はアートマンにある adr̥ṣṭa によってそれらの運動の初動が与えられることとなるからである。何故に adr̥ṣṭa がアートマン1実体にのみ所属するものとされたかは今後考察されねばならないであろう。いずれにしても、プラシャスタパーダが、アートマンをその他の8実体と等しく単なる1実体として捉えることを止め、それに優位性を与えたことは間違いない。

体系者としてのプラシャスタパーダは巧妙であった。adr̥ṣṭa との独自の関わりを失ったそれらの実体をそのままにしておくことができなかった。何故なら、よって立つべきVSに、既に考察してきたようにそれらの実体と adr̥ṣṭa が深く関わっていることが説かれているからである。しかもそこでは adr̥ṣṭa <見えない力あるいは働き>とされているのである。adr̥ṣṭa であり、運動と関わる働きを有するものが VS の中に求められねばならない。このような思考のもとに見い出されたのが行 (saṃskāra) と dharma, adharma であると考えられよう。

行は潜勢力であるから<見えないもの>である。しかも運動に関わっている。VS に行を求めてみると、5.1.17, 5.1.18, 9.22, 9.25 に見ることができる。5.1.17 と 5.1.18 は運動に関して説く節にある。5.1.17 は、

nodanād ādyam iṣoḥ karma karmakāritāc ca saṃskārād uttaram
tathottaram uttaram ca/

〔最初の運動は衝撃から起こる。そしてその運動によって造られた行（潜勢力）から次の（運動）が、そして次々が〕

と説く。直前のスートラから、矢の運動を説いたものであることがわかる。つまり物体の運動であると理解できる。5.1.18 はその行がなくなると物体が重さにもとづいて落下することを述べている。物体の運動が直接問題とされているのであるが、物体を形成するのは実体なのであるから、この行が地・水・火・風に依存する性質として認められるとし、それらの実体に配当したのである。

9.22 は、

ātmamanasoḥ saṃyogaviśeṣāt saṃskārāc ca smṛti/

〔アートマンと意との特殊な結合、そして行から憶念が生じる〕

であって、smṛti は回想することの意であるから、認識の主体としてのアートマンに関わると理解し、行はアートマンに所属する性質とされたのである。9.25 は行に基づいて無知があることを述べている。無知 (avidyā) は注釈によれば誤った知識の

ことであるとされているから³³⁾、認識に関わる。したがってこれもアートマンの有する性質としての行に組み入れられることとなる。このように行は運動を有する実体にそれぞれ配当されたのである。このことは *PDhS* の行について述べている節で、それが三種に分けられて解説されていることから理解できる。このようにして、プラシャスタパーダは *VS* の説く性質に *adrṣṭa* と共に行を加えるに至ったものと考えられる。

〈見えない力あるいは働き〉の整理が進み、*adrṣṭa* は *dharma*, *adharmā* と同一視され、人間の行為によってもたらされる潜在的な力を含み込んだものとされたのである。そして、世界の帰滅と創造にまで関わるものとなったのである。

6. 神話的創造説の採用

PDhS の説いている世界の帰滅と創造を解明すべく、その説中に見られ、かつ *VS* に基づいていると考えられる内容について吟味してきた。*VS* の説から考えると大きな変化を経ていることが理解できる。そこで改めて帰滅と創造説に着目してみる。

VS との大きな相違は自在神 (*īśvara*) を明確に説き出していることである。それは前述の *adrṣṭa* の位置づけに深く関わっている。つまりそれをアートマンの性質としたことによっているのである。*VS* において世界の形成ということを考えてみた場合、*adrṣṭa* はその動力因として充分であった。それによって最初の運動を与えられた諸実体が結合をくり返すことによって世界の形成が説明し得たであろうし、それらの分離によって世界の滅が説かれ得たはずである。しかし句義説の整備が進んでゆく中で *VS* の説の再編が行われていったのである。そして *PDhS* に至って、*adrṣṭa* がアートマンの性質に配置せられたために、ヴァイシェーシカ思想は大きく変化せざるを得なくなった。

VS における性質の定義は、

dravyāśrayī aguṇavān saṃyogavībhāgeṣv akāraṇam anapekṣa iti guṇalakṣaṇam / (1.1.15)

〔実体に依存し、性質を持たず、結合と分離とに関して独立には原因とならないというのが性質の定義である〕

とされている。これを全く受けたかたちで *PDhS* は、性質の章の冒頭に

rūpādīnām guṇānām sarveṣām guṇatvābhisambandho dravyāśritatvam

33) U本では、*avidyā* は *viparyaya* であるとされる。C本もおおよそこれに近い意味にとっている。

nirguṇatvaṃ niṣkriyatvaṃ//³⁴⁾

〔すべての色等の性質には、性質であることとの結合があり、実体に依存すること、性質を有さないこと、活動のないこと (niṣkriyatva) がある〕

としている。niṣkriyatva とは活動のないこと、つまり運動のないことであるから、結合と分離の原因とはならないことと同義である。

それ自体運動しなくなった実体アートマンにとって、現象世界の形成に携われるのは adrṣṭa によらざるを得ない。そのみが最初の運動に関われるからである。ところが、adrṣṭa は性質に位置づけられているが故に、それ自体では単独に結合と分離の因であることができない。結合と分離こそが世界の形成と帰滅の主たる原理なのであり、それは運動によってもたらされるのである。独立には結合と分離の因となり得ない adrṣṭa がその因として活動を開始するためには、それ自体以外からの契機を必要とすることになる。ここにプラシャスタパーダが自在神を導入せざるを得ない理由があったと考えられる。PDhS の注釈書である Nyāyakandali (NK)³⁵⁾、Kiraṇāvalī (Kir)³⁶⁾、Vyomavatī (Vyo) は自在神導入のいきさつについては語ってくれない。それらは既に自在神の存在が当然のものであるとの立場から註釈を与えるからである。NK の如きは、世界の帰滅と創造を積する箇所、その冒頭に、

utpattimanti catvāri dravyāṇy ākhyāya vistarāt/
teṣāṃ kartṛparikṣārtham udyamaḥ kriyate'dhunā//

〔発生したのものとしての四実体を詳細に説明したから、これから、これらの作者に関する研究の為に努力がはらわれる〕

とし、創造者である大自在神 (Maheśvara) の存在の証拠等について熱心に説いている³⁷⁾。

かくして adrṣṭa は自在神の意欲によって活動を与えられ、結合と分離の因として働くものとなった。dharma, adharma は人間の行為の結果としてもたらされる adrṣṭa としての潜勢力なのであるから、前生の行為が認められねばならない。したがって、PDhS に、創造時というのは、一端帰滅した後の創造時を意味する。世界の帰滅から説き始められた理由がここにある。くり返し行われる帰滅と創造は既にその当時説かれていたものである。一端自在神が導入されると、それらの世界創造に関わ

34) PDhS. p.94, l.6-7.

35) 注1)と同じ。

36) Praśastapādabhāṣyam with commentary Kiraṇāvalī of Udayanācārya. Ed. by Jitendra S. Jetly. Baroda. GOS. No.154.

37) PDhS. p.49, ll.18-19.

る神話がヴァイシェーシカの中の一挙に取り入れられることとなった。それがブラフマン暦であり、ブラフマンの卵の説であり、ブラフマンによる生類の創造なのである。

7. 世界の帰滅と創造

以上の考察によって、ヴァイシェーシカ思想の中で奇異とも感じられるこの説の内容を幾分か理解できるようになった。そこで主たる問題に関して諸注釈を参照しながら理解してみよう。

ブラフマン暦あるいはブラフマンの計量の採用から始まる。それは神話的な時間を示している。NKによれば、

われわれ人間にとって十五ニメーシャ (nimeṣa) が一カーシュター (kāṣṭhā) であり、三十カーシュターが一カラー (kalā) であり、十五カラーが一ナーディカー (nāḍikā) であり、三十カラーが一ムフルタ (muhūrta) であり、三十ムフルタが一昼夜 (aho-rātra) である。そして十五昼夜が半月であり、二半月が一箇月であり、二ヶ月が一季節であり、六季節で即ち十二ヶ月であり一年 (samvatsara) となる。三季節の間太陽は北行し、三季節の間太陽は南行する。太陽が北行している間が神々の昼であり、太陽が南行している間が夜ということになる。つまり人間の一年は神の一日に相当することになる。神々の三百六十昼夜で神々の一年が成っていて、それは人間の三百六十年に相当することとなる。さらに神々の一万二千年が四ユガ (catur-yuga) 期であり、四千ユガ期がブラフマンの一日である³⁸⁾。ただし、ここに言う一日とは昼のこと、つまり一昼である。このブラフマンの一昼の長さをまた一カルパとも呼んでいる。一カルパは人間の年ですると四十三億二千万年に相当するということになる。

ブラフマンの昼の終りに宇宙の消滅がおこり、夜の間、つまり一カルパの間その状態が継続する。夜が明けると再び宇宙の創造が始められる。このブラフマンは百年生きる。われわれの原典は、「その百年が終る時」というのであるから、ブラフマンの一生の終る時ということになる。この時の帰滅はマハープララヤ (Mahāpralaya) と呼ばれ、宇宙の最終時における完全な消滅のことであり、要素の消滅をその内容としている。そして、すべてのものが一神に帰すとされるのがこの帰滅である。

38) *Kir.* の記述は少し異っているようである。NK. はP.50の下欄に *Kir.* の原文を記しているので比較するに便利である。尚、本多恵著『ヴァイシェーシカ哲学体系』p.543. 訳注51) 参照。

ところが *PDhS* では異なる。全てが一者に帰するのではなく、極微の状態となった *aṇu* とアートマンが残存する。実体が残存すると主張する。ここにヴァイシュエシカ
の思想を保持しようとしたようである。したがって「ブラフマンの百年を経て」と説
きながらも、一般に説かれるマハープララヤ説には従わず、自派の思想的立場を主張
したことになる。*sūkti* は「創造と帰滅」というのは「創造とそれ以前の帰滅」とい
うことである。そうすることによって、マハープララヤを除外しているのであると解
釈している³⁹⁾。それは部分的な帰滅 (*khāṇḍapralaya*) であると理解していることと
なる⁴⁰⁾。部分的な帰滅とはブラフマンの一日の終りのそれであろう。

性質となった *adr̥ṣṭa* は、自在神の意欲によって活動を停止すると説かれる。停止
することによって存在が消滅してゆくわけであるから、逆に考えると、存在が持続し
ている間 *adr̥ṣṭa* は持続させる力として働いている理となろう。*NK* は、「それ（活
動の停止）がある時、未来の身体、感官、粗大元素は生じない。そしてまた、生じ
た（身体、感官、粗大元素）を消滅させるために、自在神の意欲とアートマンと原素
(*aṇu*) との結合から運動が生ずる」⁴¹⁾。そしてその運動によって原素の分離が起こる
ことを述べている。分離によって原素が消滅し、身体、感官、粗大元素として現象し
ていたものが極微に至るまで帰滅する、というのが帰滅に関する説である。

次の創造に関しては、それが始まる時が先ず問題となる。帰滅をブラフマン暦の
マハープララヤであると捉えた場合は想像もできない程の年月の後ということにな
る⁴²⁾。それをマハープララヤでないと解した場合には、ブラフマンの一夜の後とい
うことになる。今の場合はブラフマンの一日毎における創造である。

創造の過程は、自在神によって活動を開始させられた *adr̥ṣṭa* の働きによって、ア
ートマンと極微との結合が生じ、さらに風の極微に運動が生じ、同種の結合、異種の極
微の結合へと順次形成されてゆく。ここに二微果等の形成が説かれる。その次第は、
PDhS の説く世界の帰滅と創造を紹介した節に述べた通りである。

以上によって理解できるように、ここに説かれる帰滅と創造の説は、自在神を認め、
ブラフマン暦を採用したことによる創造説と、本来ヴァイシュエシカが主張してきた
形成説との合作であると言えよう。したがって多くの矛盾を含んだ説である。

39) 注13)の *Vyo.* に同本. p.279.

40) 同上, p.81.

41) *tasmin saty anāgatānām śarīrendriyamahābhūtānām anuṣṭāṭiḥ utpannānām
ca rināśārtham maheśvarechātmanūsaṃyogebhyaḥ karmāṇi jāyante. NK. p.51.
ll.7-8.*

42) 計算すると、311,040,000,000,000 年となるようである。

次に続くブラフマンの卵の説はふたたび創造神話の採用ということとなる。人間に関して言うならば、ヴァイシェーシカ説からすると、身体、感官等は実体の中、四大の形成によるところであり、生命現象は意とアートマンの身体への侵入結合ということで説明し得たはずである。これまた自在神を認めたことにより、神の創造とせざるを得なくなった結果である。これらのことが、VSから *PDhS* への過程においてなされたことであるのか、プラシャスタパーダの独自の思考に基づいたのかは別として、ヴァイシェーシカ派の安易な妥協と言わざるを得ないであろう。

おわりに

帰滅と創造の説を見る限りにおいて、ヴァイシェーシカ派が本来の無神論的な形成説から自在神を認め、創造説へと転換してきたことは明確である。この派が純粹に原子説に基づく積集説に徹底して展開してきたと考えた場合、インド思想として重要な課題、すなわち解脱の問題、輪廻の問題等に如何に対処でき得ていたか疑問でもある。